

・ 柰いう子（佐賀県）

嫁入りは鯨に呑まれゆくように

嫁に入る。相手の姓に入り、新しい家族の一員に入る。鯨に丸呑みされたのち、お腹のなかで小さなランプを灯して暮らすのか、あるいは筏で出奔するのか。

・ 水木貴奈子（奈良県）

昼が青白く発光する

ビルディングが受粉して曇っている

ビルがひとつの生命体として受粉して増殖する。あるかもしれない未来では、世にも美しいあおびかりのなかで都市自体が抒情し、繁殖期を迎えている。

・ 加藤 万結子（愛知県）

犬の粗相を拭きながら

いつてらっしゃいという

水たまりは増えていく

でかける私を、犬の粗相の掃除をしながら見送る家族の声。水たまりは家の内外を痛むように照る。犬に、父に、母に、歳月の反射は等しく順に訪れる。

・ うろ仔（北海道）

夕間暮れ春に合わせた装いが

混ざり合ってく街灯のシチュー

気温よりもすこしだけ早いひとびとの装い。街灯に照らし出されたとりどりの

色彩の混ざり合う混沌が匂い立つ。鍋のなかの夕べの時間。

・秦 大地（東京都）

日産のマーチ山に捨てるか
たしか今日は大安だったし

二〇二二年八月に生産終了した日産マーチ。名コンパクトカーの歴史を弔うのには大安が相応しい。山に捨てられたマーチの約四十年のめくるめく走馬灯。

・有野 水都（東京都）

敬礼をしてよ等しく凍蝶へ

年齢や性別、生まれなどによる差別が排されようとしている今。私たちは過去に敬礼してきた相手を失った。もし敬礼をするのならおしなべて凍蝶にも。

・涼木 和貴（北海道）

一人と半分のペンフレンドたちへ

一人からはみ出した半分のそのひとはだれか。けれど姿が見えないのだから一人でも半分でもいい。親愛なるペンフレンドたちへ、今日も手紙を書きだす。

・貴田 雄介（熊本県）

たんぽぽの綿毛を掬ふ春の朝
雑巾掛けはピクニックめく

雑巾掛けの床に綿毛を見つける。外から飛ばされて入ってきたものだろう。ピクニックは地に限りなく近いところとする遊戯だと一首は教えられる。

・頼田 昴（神奈川県）

やっぱりうしろを振り返ったけど

神さまの代わりに

変な犬がうなずいてくれた

後ろを振り返ってはいけない。かつてイザナキは黄泉の国から戻るときにそう言われた。イザナミの代わりにいた変な犬が、古事記とは違う物語を紐解く。

・サトヤマキュー（鹿児島県）

甘酸っぱかったり

苦かったりしてるアレを知らずに

また冬が来た

果実のようであり、記憶の断片かもしれない、生きている営みのことでもあるけれど、まだ私の知らないもの。アレを味わわないでいられる猶予に似た冬。